



Title	入会御挨拶
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Citation	関東社会学会ニュース, 16
Issue Date	1959-06-18
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77662
Type	column
File Information	A008_04161959618.pdf



[Instructions for use](#)

関東社会学会ニュース

第16号
1959.6.18

当番校
文京区原町1丁目7番地
東洋大学社会学部

才七回大会開催

六月二十八日(日) 於東洋大学

来る六月二十八日(日)東洋大学において第 七回目の大会を迎えることになった。今回の 表形式の二本建に決つたが、当番校の都合で

私は今度新しく関東社会学会に入れて貰う事になりましたが、学生時代からなじみの深い東京に対しては、私は新来のヨソ者の気持もない訳ではないけれども、再び帰つて来た心やすさもあるのです。

再びこの地に戻つて来た今の私の頭の中にある一番大きな研究課題は国民社会の問題です。三十余年前私がこの地で大学を卒業した時の卒業論文

入会御挨拶

鈴

木 栄太郎

後半における「国家理論の研究」と云うのでした。研究主題も三十余年前に戻つたのです。

東京を出てから京都での研究も「国家理論の社会学的研究」と云うのでした。然し私は京都に行つて第一に社会学的見地と云う事が問題となり、それが長い間私を苦しめ国家理論など取りつく暇もありませんでした。

その後岐阜の十八年間は家族と村落、京城の四年間にはアジヤの家族と村落を調べたいと思つて居たのです。札幌の十一年間には

都市を勉強しました。そして今再び東京に落ちついて国民社会を研究したい念願をもつて居ます。もつとちつくり落ちついて一つの研究に専念したいとは思つたのですが、なにしろ歳をとつて居ますので残り僅かの生涯の中には究明したいものの大体的見定め丈でもつけて死にたいからいそいで居るのです。国民社会を研究すれば私としては私の所謂社会的框組の全部に通じ目を通した事になるのです。

ソローキンは今ハロ

ード大学内の他愛主義研究 所長として戦争のない世界の實現の爲の研究に彼の研究の主力をそいで居る様です。ソローキンの老後らしい研究です。一生を社会学の研究に没頭した社会学者の最後の業績として誠にふさわしい研究です。社会学者は人間世界へこんなすばらしい貢献も試み得ると云う事は私等の大きなよろこびです。

協力しあつてよい勉強をしたいものです。皆様の御指導御鞭撻を御願ひ致します。

委員会の召集がおくれたため、自由発表の募集がおそくなつてしまひ、結局この部会の希望者は僅か二名に過ぎなかつた。この点委員の皆様に深くお詫びする次第である。実は最初から自由発表については考えていなかったところ、今年度は日本社会学会が関西で開催されるので、特に学会に行かれない人のためにこの部門を設ける必要があると云うことになつた訳である。それからシンポジウムの部会は(一)「現代社会と官僚制」(二)「社会学現象研究における社会学的方法について」(三)「家族」である。

今大回の特徴は報告者の中に社会学の専門外の方が参加されておられること、研究室や書齋の中ではなくて、実際の場面で活動されて居る方たちが参加されていることである。この点今大会が今後の社会学研究に當つて大いなるところが多いのではないかと期待される。

「委員会報告」

×第四回委員会(四月二十五日) 於東洋大学

×出席者、鈴木(外語大)、青井(学芸大) 河津(早大)、奥(立正)、横山(慶応) 河村(横浜)、柳下(横浜市立)、倉沢(東大)、山下(東洋大)、石川(東洋大)

*自由発表の門戸を開いておくこと。

*シンポジウムの三部門が決定した。

(一)ビュロクラーシー世話人 青井、

(二)社会心理、マスコミ、又は社会病理 世話人 倉沢

(三)家族 世話人 森岡

*次期当番校は立教大学に確定。

×第五回委員会(五月九日) 於東洋大学

×出席者、渡辺(明治学院大)、青井(学芸